

伊藤隆寿著 『肇論一字索引』

昨秋、伊藤隆寿助教による労作、『肇論一字索引』が刊行された。

研究者を益するところ甚だ大であると思われるので、内容を紹介したが筆を採る次第である。

本索引は、詳しくは、僧肇の『肇論』と、小招提寺沙門慧遠の『肇論序』との一字総索引である。

いうまでもなく現行の『肇論』は、六朝末・陳隋の頃、江南において編集されたもので、「宗本義」「物不遷論」「不真空論」「般若無知論」「涅槃無名論」の五論、及び「般若無知論」に続いて収載された「劉遺民書問」「答劉遺民書」から成っている。

そのうち「宗本義」は、「四論の根本思想を要約し統一すべく、新たに作製されて冒頭に冠せられたものである。しかし、たとえ真撰でないにしても、以後の中国仏教において、その統一の立場が注目され影響を与えていることからすれば、その思想的意義は大きい」(同索引序)と編者はいう。

中国仏教思想上に占める『肇論』の位置については、今更多言を要しない。大乘仏教思想を基本テーマにしながらも、それが老子

山内舜雄

や莊子などの中国固有思想を媒介としているところから、いわば印度仏教の中国的思想受容の原点たる地位にある。

おかげさに言えば、『肇論』の研究なくして、中国仏教の研究は、思想的にはありえない、といえよう。

したがって、慧遠の『肇論疏』を嚆矢として、元康の『肇論疏』がつづき、「三論学派の人々や牛頭禪をはじめとする馬祖下や荷沢下の禪者たち、さらに華嚴や天台の人々によって研究され」(同序)なのである。

発生基盤に、きわめて中国的性格を有する禪宗としても、この、仏教の中国的思想受容の原点たる『肇論』は、絶対に等閑視することのできぬものである。

その意味で、本索引は、禪宗史研究の人たちにも、必須のものとなる。

本索引の構成は、左の如くである。

I・画数検字表

II・四角号碼検字表

III・索引

Ⅳ・肇論のテキストについて

Ⅴ・校合一覧表

Ⅵ・本文

編者が苦心した、『肇論』のテキストは、『真福寺文庫蔵写本』以下五種、校合に使用可能な注釈書は東大寺図書館所蔵元康撰『肇論疏』（写本）等十三種を挙げ、以上の二種のほか、羅振玉輯宸翰樓叢書五種本及び八種本所収・浄源集肇論中呉集解、尊経閣文庫蔵・夢庵和尚節釈肇論（写本・『肇論研究』影印）の二種が加えられ、計四本の対校が行われている。現在これ以上の精密さを期することはできない。これによって、『肇論』の古形により近づき得ることとなる。このような異本校合一覧表が附されている上に、「凡例」をみれば明らかな如く編者は、検索の利便をはかるため、各種の周到な配慮をなし、画数検字表ならびに四角号碼検字表を附している。想えば、塚本善隆博士の『肇論研究』の研究會に参加し得た筆者は、助手の牧田諦亮先生が、「肇論思想語彙索引」を作るため、研究會の度毎にカードを採っていた姿が眼に浮ぶ。

あれから三十数年の歳月が経つ。この書評をかき了って書架より『肇論研究』を取って手にすれば、塚本先生はじめ、横超慧日、木村英一、長尾雅人の諸先生の姿が、昨日の如く想い出される。

この塚本博士の研究會に参加したことが、私の学問研究の基底を造ったといっても、決して過言ではない。

それだけに、東帰してから一度は、『肇論研究』をテキストに、大学院で演習をしたかった。その準備が漸く整ったころ、折り悪しく学園紛争にぶつかり、機会を喪った。

その後は、大学院で、『法華三大部』を講ずるのが精一杯で、と

ても『肇論』まで手は廻らなかつた。

伊藤隆寿氏は、「夢庵和尚節釈肇論とその周辺」（駒大仏教学部研究紀要第四十一号、昭和五十八年三月）に見るとき、『肇論』に関する、すぐれた業績を世に問うている。

その上、このたびは、本索引のごとき、まことに基礎的な、多くの歳月と労苦を要する成果を、世に出された。目立たないが、学問研究とは、本来かくあるべきものと思われる。

このような『肇論』研究者が本学から出たことを心から喜びたい。塚本博士の『肇論研究』のタネを、本学に播いた覚えは、私にはない。それだけに遂に『肇論』演習をなし得なかつた自己の不運、いな怠惰が、かえりみられるのである。

さらにひと言加えれば、『肇論研究』のすばらしさは、その訳文のすばらしにもある。あれほど原典に細心の注意を払い、且つ流麗な日本語は、その比を見ざるところである。

私も、漢文の和訳を、必要上ところみる。そうしないと、現在の人は読んでくれないからである。

しかし、その度毎に、自己の中国語の不足から、うしろめたさを感ずるのが常である。

その点、『肇論研究』における訳語の適確さと、加うるに流麗な訳文は、採って以て範とすべきものであろう。

漢文を和訳するたびに、私は、『肇論研究』の訳文を想い、自戒としてゐる。それは、中国語を日本語に移すおそろしさを、充分教えてくれる。

（自性院、昭和六十年九月二十七日発行、B5
判、本文一二頁、索引一三七頁、非売品）